

浅草喜劇人銘々伝

2

西条 昇

江戸川大学教授・喜劇史研究家

そがのやぐろう 曾我廼家五九郎篇②

旗一氏は著書『喜劇人回り舞台』の中で曾我廼家五九郎について「アチャカラ」の元祖（エノケンに一脈通じるおかしみがあつた）（曾我廼家におけるエノケン）などと評し、座付作者だった尾崎富三は五九郎のことを（笑わせようとしながら笑わせた人）と演劇評論家の向井典也に語っている。

浅草六区進出後の五九郎は壮士劇の時代にはマイナスでしかなかった自らの風貌や体型に漂うおかしみを最大の武器に変えて、六区に集う観客を笑わせ続けていた。

一方で、五九郎の人氣に加えて時代を嘆き取る力やプロデュース力目をつけた振興興行部は、大正6年に開始した浅草・観音劇場の経営を任せている。五九郎もその期待に応えて、翌7年3月には帝劇の歌劇部や赤坂ローヤル館でのローシー・オペラ・コミックでプリマドンナを務めた原信子の歌劇部を観音劇場に出演させ、浅草オペラの流行に貢献した。これは、浅草に出演すると格が落ちると考えて決っていた原を五九郎の巧みな弁舌で口説いた結果、実

現したものであった。大正11年6月の観音劇場では、新派劇から五九郎劇に招いて新劇部を作らせていた村田正雄（初代）と澤澤領造らでトルストイ原作の『生ける屍』を上演して話題を呼んだ。トルストイ作品では他に、婦人解放運動の先駆者で女優経験のある木村駒子のカチューシャ役、五九郎の半番役での『復活』を浅草・金龍館で上演したこともある。

関東大震災を経て、大正13年6月には新たに台頭した本内興行部が五九郎劇から曾我廼家二二三・引き次郎、泉虎、橋花村、桑田通天らの幹部俳優を一挙に引き抜き、金龍館で『喜劇春秋』を旗揚げた。大正初期に五九郎劇から分裂した曾我廼家五九郎の一座も浅草・世界館での興行を続けており、五九郎は執筆される形となった。

こうして座組も弱くなり、窮地に陥つた五九郎が思いついたのが、大正13年1月から報知新聞に連載された麻生豊の四コマ漫画『ノンキナトウサン』の喜劇化であった。僕の手元にある五九郎劇のプログラムを見ると、同年12月の浅草・松竹座で『ノンキナトウサン 活動の巻』、翌14年3月に浅草・凌霄座で『続ノンキナトウサン』が上演されて

エノケンや古川緑波らのレヴュー喜劇の台頭で押され気味になるが、『喜劇爆笑隊』の伴淳三郎、『笑の王国』の山野一郎や関時男、『ムーランジュ新館座』の有馬是馬をゲスト的に招くなどの手を打って対抗した。

一座の女優陣からは、のちに（女エノケン）と言われた武智豊子、緑波の相手役として売り出した三益愛子（旧芸名は水町清子）らを輩出させた。

昭和12年2月にかけた『ライバルである五一郎と金龍館で合同公演を行ったのが、五九郎の浅草における最後の花道となり、同15年7月7日に64歳で世を去っている。

* 34頁の写真も併せてお楽しみ下さい。



昭和8年2月の浅草・常盤座での五九郎劇のプログラムに掲載された五九郎の顔写真。



浅草・公園劇場での五九郎劇のプログラム。（筆者提供）

いる。同14年9月には五九郎の主演で『ノンキナトウサン』の花見の巻と活動の巻が映画化され、初回興行は浅草・日本館で行われた。丸顔に猪首、ズングリ体型の五九郎は原作のキャラクターにぴたりとハマり、映画の大ヒットもあつて、ノンキナトウサンは五九郎の代名詞とも言えるべき当たり役となった。地方では五九郎人氣に便乗して『ノンキナトウサン』ならぬ『ノンキナエちゃん』を演じる曾我廼家五九郎の一座もあったほどだ。

昭和に入っても五九郎の企画力は衰えておらず、昭和3年3月末には浅草・昭和座で特別出演として招いた柳家金語楼の兵隊落語を初めて劇化上演したほか、旗揚げから間もない河原崎長十郎（四代目）、中村鹿石衛門（三代目）らの『前進座』と同6年の秋から3ヶ月にわたって共に浅草・公園劇場に出演したりもした。

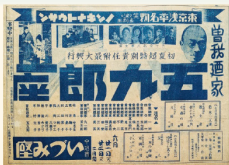
西条昇の浅草喜劇コレクション

曾我廼家五九郎篇②

西条昇の所蔵資料の一部を本文ページ（P12-13）と併せてお楽しみ下さい。



五九郎が柳家金語楼を招き、十八番の兵隊落語を初めて劇化上演させた昭和3年の浅草・昭和座での公演の宣伝用絵葉書。



愛媛県今治市・いづみ座での五九郎一座の興行ビラ。〈東京浅草名物 笑と涙の喜劇王 ノンキナトウサン〉との惹句が目を引く。左端に〈事變中〉とあることから満州事変中の昭和7年6月のものと思われる。



「ノンキナトウサン」ならぬ「ノンキナネエチャン」を売り物とした曾我廼家女五九郎の一座による地方興行のビラ。



昭和11年4月の浅草・全館館での五九郎劇のプログラム。幕間には松竹漫才陣が出演した。

西条 昇 江戸川大学教授、喜劇史研究家。

昭和39年、東京・飯田橋生まれ。幼少期より浅草をはじめとする都内の劇場や寄席で喜劇と演芸を観て育つ。新聞・雑誌への連載やTV・ラジオ出演も多数。主な著書に『ニッポンの爆笑王100』『笑伝・三波伸介』など。

